使いっ走りとベーシスト

津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使いっ走りとベーシスト

【Ｎコード】
Ｎ８８４４Ｎ

【作者名】
津凪

【あらすじ】
「僕と彼氏と兄二人」から二年後。
現状に不満を抱くひろ美と、新しく入ってきたローディーの一緒。
純粋に音楽を愛し、マナトに憧れを抱く一緒にひろ美は思うところがあるようで――。
『ラティ』にまつわる二人の物語。ＢＬ要素がとても少ないですが、あしからず。

Scene1.

『ラティ』がバンドとして大々的な活動をするようになってから、二年が経とうとしていた。
様々なライブハウスでライブをするほどに人気は高まり、最初のワンマンライブは盛況に終わった。
人気は関東圏だけに留まらず、三ヶ月後には初のツアーが予定されていた。

「久保田一緒（くぼたいちお）って言います！　よろしくお願いしますっ！」
元気よく頭を下げるその少年に、メンバーはそれぞれ反応を返す。
「ヴォーカルのキオですー。よろしくね」
「ギターのゆーいちや。ってか、キャラ被ってへん？」
「ベースのひろ美だ。よろしく」
「リーダーでドラムスのマナトです。よろしく」
一緒は頭を上げて、はきはきと返事を返す。
「はいっ」
「今度のツアーにも同行してもらうから、仲良くしといてね」
と、小野マネージャーが言う。
元気な一緒はマナトの方をちらちらと見ていたが、マナトは全く気づく様子がない。
「じゃあ、打ち合わせに入ろうか」
ひろ美は一緒の視線に気づいたが、特に何とも思わなかった。『ラティ』を代表するのはマナトであり、彼に憧れる者が多いことくらい知っていた。

何しろまだインディーズなので、ローディーも安月給である。
「イチオは何歳なの？」
「二十歳っす。専門卒業してきました」

「若いやんなぁ、羨ましいわ」
と、悔しがるゆーいちにひろ美が突っ込みを入れる。
「お前だってまだ二十三だろ」
「何や、ひがんどるのか？　二十四歳」
と、返すゆーいち。
ひろ美が言う前に一緒が首を傾げる。
「あれ、みなさん同い年じゃ？」
「ひろ美は高校で留年したから、僕らの一つ上なんだよ」
と、マナトが言う。
「あ、そうなんですか！　すみません、勉強不足でっ」
一緒はすぐに頭を下げた。
「別に気にするな。大したことじゃないし」
と、ひろ美が言い、一緒が頭を上げてそちらを見る。
「あ、はい」
初めて目と目が合った。
今時の若者らしく明るい茶髪のショートヘアに、とても幼い顔立ち。目はさほど大きくないのに、不思議と目力を感じる。
「やっぱりイチオもバンドしてるんか？」
ゆーいちに尋ねられて一緒が顔をそちらへ向ける。
「あ、はい。ギターやってますっ」
「楽器とか、機材の知識は？」
「もちろんあります！　親父がバンドマンなんで」
と、誇らしげに笑う。幼い顔がより幼く見えた。
「あまりお金出せないけど、大丈夫？」
マナトが尋ねると、一緒ははきはきと答える。
「親の許可は得てます！　今はとにかく、経験を積みなさいって言われてきました！」
親がバンドマンであるなら、同じ道を選んだ息子の背中を押さない理由はない。
「それなら安心だね。改めて、これからよろしく」

と、マナトが微笑む。
一緒は再び、大きな声で返事をした。
「はいっ！」

Scene2.

機材を車から運び出し、ライブハウス内の指定の場所へ置く。ステージでは機材をセッティングし、チューニングをする。
本番の最中は舞台袖から様子を見守り、トラブルに備える。
ライブが無事に終わると、今度は機材の片付けをし、再び車に運び込む。
まだあまりスタッフの付いていない『ラティ』では、メンバーも一緒になって機材を運ぶ。
必要な時は車を運転し、メンバーを送り届ける。
その他にも細々とした雑用をこなす。それがローディーの仕事だった。

今日の仕事はトークと握手会だ。七枚目のシングルだった。
「最近、疲れてるみたいなので、これ」
と、差し出された栄養ドリンクを受け取るひろ美。
「ああ、いつもありがとう」
事務所に入ってからずっと『ラティ』のファンでいてくれている女の子は、
「いえ、ひろ美さんに元気でいてほしいだけです」
と、にっこり笑う。最初にひろ美宛にファンレターを書いてきたのも彼女だった。名前はエナと言う。
「これからも頑張って下さいね」
彼女の声援は素直に嬉しかった。今ではワンマンで五百人を越える動員を叶えた『ラティ』だが、彼女だけはいつも会いに来てくれる。
エナがいつものようにルンルン気分で去っていき、ひろ美は次のファンと握手をした。

「握手会って、やっぱ苦手だなぁ」
帰りの車内でマナトが呟いた。
「あんまり話に盛り上がることもないし、手は痛いし……僕だけ？」
と、仲間たちを見る。
「確かに、手は感覚無くなってくるわな」
「ボクはそうでもないけど、たまにすごい緊張してる子いるよね。あれ、面白い」
と、ゆーいちとキオがそれぞれに言う。
「何が面白いだよ、相手に失礼だろ」
ひろ美が言うと、キオが言い返す。
「だってボクがにこってしただけで、顔真っ赤にするんだよ？　逆にびっくりしちゃった」
「あ、それ分かるかも。今日はなかったけど、僕もよく告白されるんだよねぇ」
「なんて返してるん？」
「彼氏がいるからって、普通に」
と、マナト。それは設定上だけではなく、事実としても存在していることだった。マナトにはすでに付き合って二年になる彼氏がいる。
「だいたいの子は、分かって言ってるみたい」
バンドマンに本気になるファンなんて、ごく一部だ。
それを聞いて、キオがゆーいちへ尋ねる。
「ゆーいちは告白されたことないの？」
「俺？　んー、無いな。ブログでは大好きって言われるんやけどなー」
と、首をひねる。
キオがゆーいちに対して何か言うのを横目に、マナトがひろ美へ言う。
「そういえば、またあの子来てたね」
「ああ、来てたな。今日は栄養ドリンクくれたぞ」

と、返す。
「良かったじゃん。ブログに愚痴ばっか書くからだよ」
「あれ、お前俺のブログ読んでたか？」
「ううん。朝、暇だったから読んだだけ」
「……そうか。みんなに謝ろう」
と、ひろ美。着実に人気を集めながらも、ひろ美は今の『ラティ』に対してどこか消極的になっていた。ここ最近では、ライブの後、いつも必ずむなしくなる。
「それが良いよ。僕らのファンって、みんな良い人だから」
そしてマナトはにっこり笑う。たった二年なのに、マナトは大人になっていた。年上のはずのひろ美が、純粋に同性として劣等感を抱くほどに。
ひろ美は、疲れていた。

Scene3.

「煙草、買ってきましたっ」
楽屋で待機するひろ美の元に、煙草を手にした一緒が戻ってくる。
「ああ、ありがとう」
と、ひろ美はそれを受け取る。本番までまだ時間があった。
「ちゃんと買えたんやな、イチオ」
「当たり前ですよ、おれだって成人してますから」
ゆーいちのからかいに一緒がそう答える。すると、近くで聞いていたキオが口を挟んだ。
「でも年齢確認されたでしょ？」
一緒と同じく童顔のキオも、年齢確認されるのが日常茶飯事となっていた。
「されましたね、免許証なかったら買えなかったっす」
と、一緒は笑う。
「だよねー。ほんと、童顔って損だよねぇ」
「損ですねぇ」
お互いの苦労を知る二人がうんうんと頷きあう。
「別の人に頼めば良かったのに」
と、マナトがひろ美へ言うと、ひろ美はライターを探りながら答えた。
「手の空いてる奴があいつしかいなかったんだ。仕方ないだろ」
そしてライターを見つけ出すと、早速煙草を口にくわえる。
「まあ、そうだけど……吸うならあっちでね」
と、マナトは自分から離れるように言う。
「ああ、悪い」
ひろ美は席を立って隅へ寄るが、煙草に火をつける前に言った。
「相変わらず神経質だな。もう兄貴たちと暮らしてないくせに」
火を点けて、一息吸う。

「そうだけどさ、ひろ美には悪いけど、やっぱり近くで吸われるのは嫌なんだもん」
と、マナト。
その会話を聞いていた一緒がキオへ問う。
「マナトさんって、お兄さんいるんですか？」
「いるよ、二人ね。だからマナトは末っ子」
「あいつの兄貴、双子なんや。最近見てないけど、おもろい人たちやで」
ゆーいちが説明を加えて、一緒は納得する。
「へぇ、双子ですか。ちょっと意外っすね」
まだひろ美と会話をしているマナトの方をちらりと見る。
「てっきり長男だと思ってました」
「そうなんだよねぇ、外見しっかりしてるから騙されるんだよー」
と、キオ。
「実際に付き合っていくと、その逆だって分かるんやけどな。あいつはほんま、見た目によらない奴やで」
「そうなんですか」
ローディーとしての仕事を優先してしまい、親交を深めるのは二の次になっていた。一緒はまだ、マナトだけでなくひろ美やキオ、ゆーいちのことをよく知らない。
「っていうか、ひろ美ってそんなにヘビースモーカーだったっけ？」
会話の途中でマナトがそう尋ねた。
「俺は昔から吸ってるぞ」
と、返すひろ美にマナトは言う。
「でも前は、二箱も吸ってなかったと思うんだけどなぁ」
「……そうか？」
ひろ美はマナトから視線を逸らして考える。
煙草を吸い始めたのは高校に入学して間もない頃だった。最初は隠れてこっそり吸っていたのだが、家族にばれて怒られた。その苛立ちから煙草をやめられなくなって、学校にもばれて停学になった。

まともに勉強していなかったこともあり、単位を取れずに三年生を二度送るはめになった。
専門学校に入ってからは毎日が忙しくて、自然と煙草の量は減っていた。成人する頃には禁煙したわけでもないのに、一日吸わなくても平気だった。
それなのに今の忙しい日々が始まってからだ、ひろ美がまた煙草を吸い出したのは。今では、一日に二箱開けるのが普通になっている。
「別に、ゆーいちだって吸ってんだから良いだろ」
名前を呼ばれたゆーいちがひろ美を見るが、それより先にキオが言う。
「ゆーいちはただの格好付けでしょ。ひろ美は本当にヘビー」
「かっ……そ、そうや。俺みたいに節度ってもんをな――」
「そうだよ、ゆーいちは煙草吸ってる振りだもん。ひろ美がおかしいんだよ」
「ふ、振りちゃうわっ！　聞き捨てならんぞ！」
言いたい放題のキオとマナトに腹を立てるゆーいちだが、構わずにひろ美は言う。
「だが、禁煙しても成功する気がしない」
「意志が弱いんだよ。ひろ美、意志薄弱ー」
「はくじゃくー」
「ふん、勝手に言ってろ」
と、ひろ美は背を向ける。
マナトが、蚊帳の外にいた一緒に手招きをする。
「何ですか？」
すぐに寄っていくと、マナトは一緒の耳元に囁いた。
「今度煙草買いに行かされた時は、のんびり帰ってきて良いよ」
「え？」
「ひろ美には我慢を覚えさせなくちゃ」
と、マナトが笑う。

一緒は少し苦笑しながら頷いた。
「はいっ」

Scene4.

万人受けする曲が『ラティ』らしいとは限らない。
ひろ美は溜め息をついた。先ほどからギターを抱えてパソコンと睨み合っているのだが、作りたいと思う曲が作れない。机の端に置いた灰皿だけが積もっていく。
頭の中にはメロディが出来上がっているのに、それが手に伝わらない感覚だった。まるで自分ではないもう一人の誰かがいるような、分かり合えない感覚。
「……」
かろうじて形になった一小節を奏でてみる。その勢いから次の小節へ行けるかと思ったが、やはり指が途中で止まってしまう。
苛々していた。
さっき吸い終えたばかりの煙草に再び手を伸ばし、火を点す。

一緒はよく働いた。嫌な顔一つせず、てきぱきと動いた。
「あんなに良い子が、何でボクらのところにいるんだろうね」
と、キオがふいに呟く。
「さあな。でも確かにええ子やな」
「ゆーいちの代わりにギター弾かせたいな」
「なんでやねん！」
相変わらずいじられては突っ込みを入れるゆーいち。
キオはただ笑いながら、冗談だよーとゆーいちをなだめる。
「でも、車の運転も出来るから、出来ればずっといてほしいくらいだよね」
と、キオ。
「せやな。一生ローディーってのもキツいけどな」
ライブの最中も指示した仕事をきちんとこなす一緒。舞台袖からしっかりステージも見ている。

『ラティ』に関わる上で学んだことを全て吸収しているならば、彼がステージの上でスポットライトを浴びる日も遠くはないだろう。
機材車に機材を積み終えると、マナトの携帯電話が鳴った。
一同が見守る中、マナトはいくつか言葉を交わすと通話を切る。
「ごめん、純が近くにいるって言うから、今日は純と一緒に帰るね」
と、マナトは言い、車に乗せられた荷物を手に取る。
「そう、気をつけてね。お疲れ様」
「はい、お疲れ様でした」
小野マネージャーが助手席に乗り込み、一緒もすぐに「お疲れ様でした」と頭を下げて運転席へ着く。
ひろ美たちもそれぞれに声をかけてから車内へ入る。
扉が閉まるのを確認してから一緒はエンジンをかけた。
車内はいつにも増して静かだった。信号待ちをしている時に一緒は言う。
「ひとつ、聞いても良いですか」
「何？」
小野が返事を返し、一緒は思い切って尋ねる。
「マナトさんが一緒に帰るって言ってたの、恋人ですか？」
後部座席の三人がそれぞれに一緒の方を見る。
「ああ、彼氏や」
と、軽く答えるゆーいち。
「……本当に、そっちの人なんですね」
前を見つめたまま、再び車を発進させる。
「あ、設定だけだと思ってたんでしょ？　残念だったねぇ」
キオがそう言っておかしそうに笑う。
「俺らもびっくりしたわ。っつーか、あいつら長いよなぁ？」
「そうだねぇ、二年くらい？」
「ああ、そうや、思い出した！　俺らが人気出るきっかけがあいつやねん」
「きっかけ？」

と、一緒は後ろを見る振りをする。
「彼氏のいるって設定が出来たのが、マナトと純が付き合うことになってからだったの」
「ふぅん、そうなんすか」
会話が落ち着いたところで、それまで黙っていたひろ美が唐突に一緒へ尋ねる。
「ショックか？」
「え？　ああ、なんて言うか……変な感じです」
ひろ美は何も言葉を返さず、また口を閉ざした。
一緒は胸が妙にもやもやするのを感じながら、素知らぬ振りで運転を続ける。

Scene5.

バンドとしてではなく、ベーシストとして評価されることも少しずつではあるが増えていた。
「おはようございます！」
朝から元気な声を出す一緒を見て、ひろ美は言う。
「わざわざ来てくれなくて良かったのに」
一緒は動じずに助手席の扉を開ける。
「小野さんに頼まれたんですよ。車があるならひろ美さんの送り迎えしてくれって」
「……別に一人でも行ける」
言いながらひろ美は助手席に乗り込む。
すぐに反対側へ回った一緒が運転席へ着き、口を開く。
「じゃあ今日はおれ、ただの運転手で良いです」
と、へらりと笑う。
ひろ美はシートベルトを締めながら返した。
「そうだな、それで良い」
今日は小さな記事のインタビューだった。撮影がないので、一時間もかからずに終わる予定だ。場所だって車でなくても行けるところにある。
送迎される必要はない、とひろ美は思っていた。
一緒が車を発進させる。
「どのくらいで着く？」
「そうっすね、二十分くらいでしょうか」
ひろ美は携帯電話を取りだした。今の内にブログを更新しておかないと、忘れてしまいそうだった。
「……お前、バンドやってるんだろう？　活動は？」
ふと顔を上げてひろ美が問うと、一緒は言った。
「ちゃんとやってますよ。今日は夜、スタジオですし」

「そうか。体力的にきつくないか？」
気遣ってくれたのかと思って一緒が横を見ると、ひろ美はまた携帯電話の画面に目を落としていた。
「きつくないと言ったら嘘になりますね。でも体調管理はしっかりしてるんで、平気です」
ひろ美は言葉を返さなかった。
『ラティ』のメンバーはそれぞれに良い人だと一緒は思う。けれども、どうしても慣れないのがひろ美である。リーダーのマナトを支える陰のリーダーだということは察しても、深くまで入り込むことの出来ない壁があるように思えて、未だに接し方が分からない。
携帯電話を閉じたひろ美が、窓外に目を向けて言う。
「お前、マナトのことをどう思ってる？」
「え？」
一瞬だけ気が抜けた。すぐに運転に集中できたから良いものの、あまりにも突拍子がなかった。
「マナトさんは、おれの憧れですよ。男としても、ミュージシャンとしても」
ひろ美はさらに問う。
「彼氏と同棲してても？」
「……関係ないです。なんて言うか、おれ、マナトさんのドラムが好きなんです。あの人と一緒にステージに立てたら良いなって……偉そうなこと言っちゃって、すみません」
「いや」
こちらを見ようとしないひろ美に、一緒は聞こえないように小さく溜め息をつく。
――何を考えているのか、全く読めない。
「それだけか？」
「え？　……あ、言っておきますけどおれ、ノンケですよ。男性には興味ないです」
いつものように明るい調子を作って返す一緒だったが、ひろ美は

何も言わなかった。
二人きりの車内はとても気まずかった。
「……こういう仕事をしていると、様々な人に出会う」
呟くように言ったひろ美に、一緒はとりあえず相づちを打つ。
「そうっすね」
「男も女も、若い人から年のいった人も。無限にすら、思える」
ひろ美は遠くを見つめていた。否、窓に映った自分を見据えていたのかもしれない。
「俺たちの存在意義とか、俺のやってることとか、それら全ては本当に誰かに必要とされてるのか、分からなくなる」
「……はい」
彼のいうことは分からないでもなかった。自分よりも演奏の上手い人たちはごまんといるし、その大きな人並みの中で埋もれるだけじゃないのかと錯覚する時もある。自分は必要とされていないのではないか、と。
「俺は無力だ。何もやろうとせずに諦めて、気づくと別の何かを失って、また自分を誤魔化して、同じことを繰り返す」
「そんなこと、ないですよ」
「……お前に何が分かる？」
一緒はめげずに答える。
「分かりません。でも、ひろ美さんは努力してるじゃないですか。おれからしたら、すごく頑張ってて、努力の天才だって思います」
ひろ美が深く溜め息をついた。
「ありがとう」
それは感謝の言葉ではなく、これ以上何も言うな、という合図だった。
一緒は口を閉じ、一刻も早く目的地へ着くことを密かに願う。

Scene6.

ツアーが始まっても、一緒とひろ美の間には距離があった。
友好的なキオとゆーいちの二人とはすっかりなじんでいたものの、ひろ美とは上手く付き合えない。マナトの場合は「憧れ」というフィルターを未だ取り除けずに見てしまう。
「ブログってさ、三日更新しないだけでも心配されるよね」
「あと、風邪引いたって書くだけでもメッセージくれる子、おるよな」
「終電に間に合わない、って書いただけなのに、くれた子もいるよ」
長距離を移動する車の中で、ひろ美以外の三人が会話をしていた。
「今回は初めてのツアーだから、体調崩せないよねぇ」
「俺らを待っててくれる人のためにもなぁ」
「心配されるのって、案外重荷になるしね」
「でも、移動中ってヒマだね」
「ひろ美はさっきから作業してばっかりやしな」
と、ゆーいちがひろ美を見る。
ひろ美はノートパソコンにイヤホンをさして作曲に励んでいた。
「まあ、良いんじゃない？　僕らも静かにしてようよ」
マナトの言葉に、二人がひそひそ話をするような声量で言う。
「そうだね、作業の邪魔したら悪いしね」
「むしろ今の内に寝ておこうや。それなら静かやろ？」
すると、ひろ美が左耳のイヤホンを外して振り向いた。
「そっちの方が気が散る。しゃべりたいなら普通にしゃべれ」
「あ、聞こえてた？」
「何や、人がせっかく気ぃ遣うたのに」
「ごめんね、ひろ美」
三人三様に言うと、ひろ美はすぐにイヤホンを再び装着する。
「話すか静かにするか、どっちかにしてくれ」

今日のひろ美はあまり機嫌が良くなかった。口をきいてくれるだけまだマシだったが、この半年近くひろ美は誰との間にも距離を置いていた。
そのことに三人は気づいていたが、どうしたら直るか分からないし、下手に行動を起こしてひろ美と喧嘩になるのは避けたかった。基本的に臆病で平和主義なのが『ラティ』だ。
「……そうだよね」
と、キオが呟く。ひろ美のことは、ひろ美自身が解決するしかなかった。

現代ではミーハーなファンの方が多いが、本当に好きな人は追いかける。
「初めましてー、エナですぅ」
「あ、初めまして」
遠征先で、ネットで知り合った相手と顔を合わせる。
「遠征するの初めてで緊張したけど、会えて良かったー」
と、安堵の笑みを浮かべるエナ。
「そうなんですか？　わたしも『ラティ』のライブは初めてなんで、ちょっとよく分からないんですけど」
「安心して下さい、あたしライブの常連ですから」
「ですよね。今日はエナさんに付いていきますっ」
年が近い相手だけに初対面という壁はあっという間に崩れ去っていた。
にこにこするエナは、心の中だけで相手を観察しながらライブハウスの方へ歩き出す。
「そういえば、新しくローディー入りましたよね？　エナさん、見たことあります？」
「あー、それなんだけどまだ見てないの。噂では男の子だって話なんだけどね」
相手もまたひろ美のファンだと聞いているが、それ以外に共通点

はなさそうだった。何故なら、服のセンスがすでに真逆だ。相手は大人しめのカジュアルに対して、エナは原色使いのパンク風。
「そうですか。物販は女性スタッフの仕事ですもんね」
「ひろ美さんのブログによると、すごく良い子みたいよ」
「あ、それ見ました。ゆーいちのブログにもちょこちょこ出てきますよね、ローディーさん」
「童顔で高校生にしか見えないってあるけど、それだと全然分からないしねぇ」
「写メが載ると良いんですけどねぇ。あー、見てみたいなぁ」
心は開いている様子だが、この先一緒にいるとその分だけ気を遣ってしまう気がした。
「あれ、この信号渡るの？」
「あ、はい。信号渡って左です」
重たい荷物をキャリーケースでころころ運びながら、エナは一日限りの友人と道を行く。

Scene7.

初めての土地でのライブは、それなりに盛り上がった。
エナのように追いかけてきてくれる子もいたし、何より地方にもファンがいた。キオの歌声を待つ人たちがいた。
その様子は一緒からしたら羨ましい限りだ。自分もいつか、こうして地方にもファンを持ちたい。

翌朝、ひろ美が目を覚ますと同室のキオがすでに服を着替えていた。
「あれ、どこか行くのか？」
上半身だけ起こして尋ねれば、キオがにっこり笑う。
「観光だよ！　移動まで時間があるでしょ？」
「……ふぅん」
冷め切らない頭を欠伸で起こし、ひろ美は言う。
「気をつけてな」
「え、ひろ美も一緒に行こうよー。マナトとゆーいちも誘ってあるし」
と、キオ。
「うん、俺は寝る」
再びベッドに横になり、毛布を被る。
キオはそんなひろ美に呆れながら、鞄を手に取った。
「もう八時半だよ。朝食抜いちゃ、ダメだからね」
「うん……」
適当にひろ美が返事をすると、キオはそそくさと部屋を出て行った。
隣室からマナトとゆーいちの声がし、やがてそれも消えて遠ざかる。
うとうとと思考回路をさまよっていた。考えるべきことが泡のよ

うに消えて、どうでもいいことばかりが頭を埋め尽くす。
昨日のライブは確かに楽しかったし、新鮮だった。オーディエンスの反応がいつもと違って、以前よりは収穫のあるライブになった。
ただ、ファンにあまりピックを投げてやれなかった。マナトは相変わらず後方へスティックを投げたけれど、ゆーいちはピックを大量に用意しすぎだ。自分が悪かったのか？
どうでもいい。もう過ぎたことだ、どうでもいい。
一瞬だけ意識が途切れ、ひろ美ははっと目を覚ます。
起き上がっても室内には誰もいなかった。そういえばキオが観光に行くと言っていたのを思い出す。
「……九時」
あれから三十分以上が経過していた。
小さく欠伸を漏らし、ベッドから降りる。
シャワーを浴びようとして、壁に掛けられた鏡の中の人物と目が合う。
疲れた顔をしていた。キオの「朝食抜いちゃ、ダメだからね」という言葉が脳裏に浮かんで、納得する。
自分はひどく痩せていた。体重は測っていないので分からないが、二年前よりは確実に減っているだろう。どう見ても不健康だ。
溜め息をついて、さっさとシャワーを浴びる。
それから部屋に出て私服に着替え、朝食をどうしようか悩んで、やめた。
食欲がない。疲れすぎだろうか。確かホテルから離れたところにコンビニがあったはずだから、散歩ついでに何か買ってこよう。
ホテルへ戻ると『ラティ』のスタッフたちがロビーで打ち合わせをしていた。面倒だったので気づかない振りをしたが、この後はスタッフたちも出発の時間まで自由行動らしい。
部屋へ戻り、一人きりの空間で買ってきた栄養調整食品を食す。
こんなもので腹が満たされることはないと分かっていたが、今はこ

れくらいしか食べる気がしない。そして同時に購入した飲み物を飲んで、一息つく。
――自分も観光に行けば良かった。
ふとそんな考えがよぎり、ひろ美は首を振る。観光なんて行ったって、疲れるだけだ。なら部屋でのんびりしていた方が良い。
ゴミ箱にゴミを捨て、今の内に荷物をまとめる。
しかしそれも五分程度で終わってしまい、ひろ美は呆然とした。退屈だ。
テーブルに置いた携帯電話を取りあげて、適当にいじる。ブログを書いてみたものの、ネタがなくてあっという間に終わってしまった。
「……」
ベッドに寝転んで、ふと電話をかけてみる。
「あ、お前、今どこにいる？」
一緒だった。さっきまで打ち合わせをしていたはずだから、そう遠くに行ってないだろうと思ったのだ。
「そうか。ヒマなんだ、俺の部屋に来てくれ」
言うだけ言って通話を切る。……ひどい奴だな、と自分で思った。
一緒はまだホテル内にいたから良かったが、外にいるのを呼び出したのだとしたら一緒が可哀相だ。完全に使いっ走りではないか。
溜め息をついて、上半身を起こす。
――すぐに一緒は部屋にやって来た。

Scene8.

「キオさんたちと観光行けば良かったのに」
と、一緒は冗談交じりに言う。
「寝過ごしたんだ」
ひろ美が答えれば、一緒は「そうなんすか？」と、笑う。
「まあ、きっと次がありますよ」
そう言いながら一緒は、ベッドに腰掛けたままのひろ美を見て、どこにいるべきか迷う。
するとひろ美は言った。
「好きなとこ、座って良いぞ」
「あ、はい」
椅子に座ろうとする一緒だが、相手がベッドにいるのでその向かいのベッドへ腰を下ろした。話をするなら相手とは同じ目線が良い。
「ってゆーか、何でおれなんすか？」
素朴な疑問をぶつけると、ひろ美が煙草を探りながら言う。
「なんとなくだ」
取り出した煙草を口にくわえるひろ美だが、ライターが見つからない様子だった。それに気づいた一緒が立ち上がり、テーブルの上に置かれたライターと灰皿をひろ美へ手渡す。
「ああ、悪い」
「いえ、別に」
ひろ美が煙草に火を点けてから、向かいに座った一緒を見る。
「他にもバンドはあっただろうに」
「は？」
首を傾げる一緒にひろ美は煙草を吸ってから答える。
「ローディーなんてどこのバンドも募集してるだろ」
理解した一緒は言葉を選びながら返事をした。
「そうですね。でも、やっぱり好きなバンドだったり、自分がやり

たいことと似たことをやってる人たちの方が良いじゃないですか」
「お前も俺たちみたいにやりたいのか？」
「まあ、言ってしまえばそうなりますね。おれ、激しすぎるロックってあんまり好きじゃないんですよ」
ひろ美は一緒の表情をじっと見つめる。
「『ラティ』は明るい曲が多いじゃないですか？　聞いててすっきりするような、そういう曲が好きなんです」
吐いた煙が一緒に当たらないよう、そっぽを向く。
「それにマナトさんには、一年くらい前から憧れてて――」
ひろ美が溜め息をついて煙草を灰皿に押しつけた。びくっとした一緒は言葉を継げずに、戸惑う。
「あの、えっと、だから……おれ、えーと」
ひろ美の気分を害してしまったのかと思った。らしくもなく一緒は困惑していた。
「なぁ、イチオ」
「は、はいっ」
名前を呼ばれて姿勢を正す。
ひろ美はじっと一緒の顔を見つめていた。身動きの取れない一緒は、ただ相手の動きを待つ。
そっと立ち上がったひろ美が、一緒の隣に座るのとほぼ同時にその後頭部を抱き寄せた。
一緒が状況を理解したのは、唇が重ねられてからだった。そのまま後ろに押し倒され、一緒は侵入してくる舌を拒む。
両肩を掴んで押し離せば、ひろ美が先ほどと変わらぬ目で見下ろしてくる。
「……」
一緒は無意識にひろ美を睨んでいた。裏切られた時のような、不信の目だった。
「嫌か」
ひろ美は答えを求める様子もなく言って、一緒を解放する。

「……失礼します」
起き上がった一緒はそう言うと、すぐに部屋を出て行った。ひろ美はまた、一人きりになっていた。

その後のツアーでは、お互いに必要な会話しかしなかった。一緒の方から忙しい雰囲気を出していたので、二人の間を疑う者もなかった。

どうしてキスをしたかと言われても、何故押し倒したのかと聞かれても、ひろ美は「ただ、なんとなく」とか「苛ついてたから」とかいう理由しか思いつかなかった。ただ一緒を見ていて、したくなっただけだった。あの時拒まれていなければ、きっと肉体関係すら築いていただろう。それくらい、衝動的なものだった――。

「盛り上がっていこうぜー！！」
キオの合図でマナトがドラムを叩き始める。
これまでと同じようにベースを弾きながら、ひろ美はふと思った。
――自分は、一緒のことが好きなのかもしれない。それをまた、自分は誤魔化そうとしていた？
――嗚呼、苛々する。

Scene9.

どうしようもなかった。自分はノンケで、それは相手も知っているはずだった。拒んで当然なのに――あれからひろ美は、寂しそうにすることが多くなっていた。

「……相談しても良い？」

「何？」

スタジオ練習での休憩中、一緒は仲間へ言った。

「おれ、男にキスされちゃった」

他の仲間たちが一緒の方を見て、口々に言う。

「何で？」

「相手、誰？」

「お前、この前までツアーだったんだろ？」

「お前らは黙ってろ。で？」

自分のことを分かってくれている仲間が、一緒に続きを促す。

「うん……その人さ、本当に何考えてるか分かんなくて、突然のことだったし、おれ、どうしたらいいか分からなくて、その時は逃げちゃったんだ」

今でもあの時の、煙草の味が忘れられなくてむずむずする。

「その相手って、誰？　ああ、仕事の相手なのか別かだけで良い」

「……バンドの人」

他の仲間たちがこそこそと、あることないことをしゃべり出す。

「そっか。……で？」

一緒は俯いて言う。

「その人、おれのことが好きだったのかな」

「何でそう思うんだ？」

なんて言葉にしたらいいか考えながら、声に出す。

「だって、あれから寂しそうにすることが増えてて……前から、よく一人でいる人だったけど、それとは違くて、なんて言うか……」

もっと、優しく拒否することが出来れば、きっと彼を傷つけずに済んだかもしれない。
「おれ、あの人を傷つけた気がして、怖いんだ。ローディーをやめる気はないから、なおさら」
珍しく落ち込む一緒を見て、その肩に腕を回す。
「大丈夫だよ、イチオ。それからは何もされてないんだろ？」
「う、うん」
「きっと諦めてるって。お前はノンケなんだし、それくらい仕方ないって」
な？　と、元気づけてくれる。
一緒は頷きながらも、まだ胸の中がすっきりせずにいた。

キオはあまり恋愛の詩を書かない。ゆーいちの作詞作曲した歌は個性的でウケ狙いが多いが、マナトはむしろバラードの方が得意だ。今回のツアーで披露したマナトの作詞作曲した歌は良かった。誰もが耳を澄ませてじっくり聞き入ってくれた。
それなら自分は――？
……ひろ美は、どんな曲でも作ろうと思えば出来た。バラードもポップもロックも、暗い曲も明るい曲も。それは音楽を始めた頃からやってきたいわばライフワークであり、それはどこか当たり前にもなっていた。だからこそ『ラティ』の多くの曲をひろ美が作っているわけだ。
「で？」
ひろ美は自分自身に問いかけた。自分の作った曲は、本当に良い曲なのか？
分からなかった。判断が付かない。
それでも、頭の中に流れるメロディは感傷的で静かで、悲しいバラードの詩が似合いそうである。この今の思いを形にしたら、どんな曲が出来上がるだろう。
身体を起こして起動させたまま放置していたパソコンへ向かう。

エレキギターを抱えて、パソコンへつなぐ。アイコンをクリックしてソフトを表示させる。
頭の中のメロディを、思うままに、その場の勢いだけで譜面にしていく。
ぐるぐる回る満たされない気持ちを、音符に乗せる。
――何分経っただろうか。
最初から終わりまでメロディが出来上がると、ひろ美の脳裏に一緒の姿が映った。マナトに憧れる純粋な、何もかもを分かった振りして前向きに捉える彼の、幼い笑顔。
「……」
好きなのかもしれない、と思った気持ちは本当だった。自分の部屋で、一人きりでいるからこそ、分かる。
「……ああ」
彼を滅茶苦茶にして、ぐちゃぐちゃに壊して、泣かせたい。彼の誰にも見せない顔を、本当の彼を知りたい。今の自分を投げ捨てても良いから、彼が欲しい。愛されたい。
そう想っても、無駄だった。一緒はあの時、あからさまにひろ美を拒絶した。不必要な会話だって、交わしてくれなくなった。
「ああ」
自嘲するように笑って、ひろ美は両目を閉ざす。
全てが今更だった。もう何をしても変わらない。こんな想いを前にも経験したはずなのに、ひろ美は自分を誤魔化すことに慣れすぎた。
――頭の中でいっそう強く響き始めたメロディに、切なる言葉を足していく。

Scene10.

ツアーという大きな仕事の後は、ローディーとして働くことが減った。次のライブまではたっぷり一ヶ月もある。
その間に一緒は自分の音楽活動に励もうと決めていた。
ただ、それは『ラティ』から背を向けるような気もして、一緒はあまり気が乗らなかった。

「ひろ美、何か悩んでる？」
「え？」
撮影の合間にマナトから声をかけられて、ひろ美はびくっとした。
「最近、調子悪そうだからさ。僕で良ければ、相談に乗るよ？」
優しく言うマナトへ、ひろ美はなんて返すか迷った。まさか一緒にキスしたなんて言えないし、一緒に対する想いを吐露したところで無意味だった。たとえ仲間たちが応援してくれても、もう実らない恋だ。
「……悪い。別に、悩んでるわけじゃないんだ」
嘘だった。ひろ美は言ってしまってから後悔する。また自分は、自分を誤魔化した。
「もしかして、次のアルバムのこと？　曲、まだ出来てないんだよね」
「……いや、それはそうなんだが」
『ラティ』は次にアルバムを出す予定だった。しかしそれに収録する曲がまだ完成していないのだ。
言葉を濁すひろ美にマナトは言う。
「気のせいなら良いんだけど、ひろ美さ、僕たちに何か言いたいことがあるんじゃないの？」
じっと目を見つめられて、ひろ美は戸惑う。
言いたいことなら、山ほどあった。人気が絶頂へ向かっている今

は、ない方が不自然なくらいで。
「前みたいに笑わなくなったし、最近は本当に元気ないから、心配だよ」
「……ごめん」
マナトの優しさがひろ美の胸を傷つける。普段言わずに隠していることを、今この場で口にする気にはなれなかった。
「……明日の打ち合わせの時、話し合おうか」
「話し合うって？」
「僕らのこと。今はファンもいるし、堪えるべきだとは思ってる。けど、一度は真面目に話し合わなくちゃいけないと思うんだ」
マナトの目は真剣だった。
彼もまた現状に思うところがあるらしい。ひろ美は「そうだな」と、頷いた。

まだ二十年しか生きていないけれども、人生を歌う。
いつか大好きな人と巡り会って結婚して子供を作って、おじいちゃんおばあちゃんになって、それでも自分は自分であり続けたいと歌う。
この先、何が起こるか分からなくても、希望を持って生きたいと、ギターをかき鳴らす。
予測不能なこの人生を、一度きりの自分の生を。

「じゃあ、僕から言わせてもらうね」
打ち合わせの後だった。『ラティ』の四人だけで話し合いを始めた。
「最近はファンのことを考えすぎてる気がする。昔は、もっと自分たちのやりたいことだけやってたじゃない？」
マナトの言葉は正しかった。キオもゆーいちも、ひろ美も、ファンのことばかり優先していた。どんな曲なら喜んでもらえるだろうか、どんなパフォーマンスをすれば盛り上がるだろうか。

「そうじゃなくて、初心に戻ろうよ。確かにバラードもウケるんだけど、昔みたいに軽快なリズムのポジティヴな曲を、僕はやりたい」
四人で活動を始めた頃のように、がむしゃらに歌を奏でていたあの気持ちで。
「……せやけど、実際に人気が出るのは恋愛の歌ばっかりやん」
「ボクの詞よりも、マナトの方が人気だよね」
ゆーいちとキオがそれぞれに言って、マナトが口ごもる。
「そうだけど、でも……」
実際に恋愛を楽しんでいるマナトの詩が人気を集めるのは、しかたのないことだった。
「それに、昔みたいにやったって今のファンが付いてきてくれるかどうか」
と、キオが不安げに言う。
あの頃の方が『ラティ』らしかったのは四人とも知っている。分かっているはずなのに、今となってはファンがなくなるのが惜しくてどうしようもない。
「やっぱり、力不足なんじゃないか？」
ひろ美が口を開くと、三人は俯いた。
「俺たちが本当にやりたいことをやって、ファンが付いてきてくれなければ、俺たちはそれまでだったってことだ」
実力が伴っていなかったのだ、と。
「……でも、ボクたちをここまで支えてくれたみんなには、やっぱりそれ相応のものを返したい」
「そうやな。昔みたいにやってもええけど、一方でちゃんとファンを離さんようにせんと、俺らはダメになるで」
「……そうだね」
ファンの間で名曲と囁かれる歌もあるし、それらを今ここで手放すわけには行かない。
「もう俺たち、限界なんじゃないか？」
呟くように言われたひろ美の言葉に、三人がはっとする。

「少なくとも、今の状態でメジャーに行けるとは思えない」
「……けど、まだやれるよ！」
と、キオが声を上げる。
「ひろ美が限界なら、ボクたちが何とかする。ゆーいちだって作曲は出来るし――」
「そうじゃない」
空気が張り詰める。
「俺だってまだやれる。限界なのは俺たちだ」
強い口調でひろ美が言うと、マナトが申し訳なさそうに言った。
「でも、ひろ美の作ってくる曲は、どれも似たようなものばっかりだよ」
「え――？」
思わぬ指摘にびくっとしてしまう。自分は何でも作れる気でいたのに、似たようなものばっかり？
「特にここ最近は、暗い曲ばっかしやもんな。言うのが遅くて、ごめんな」
と、ゆーいちも言う。
ひろ美は何も言葉を返せなかった。どうやら問題は、自分自身にあったようだ。
「……とりあえず、アルバムを出してから今後のことは考えようよ」
キオの言葉に全員が頷いた。

Scene11.

がむしゃらに曲を作っては捨てた。仲間に指摘されたことを未だに受け止めきれなくて、自分の存在すら危うくなっていた。
明るい曲を、出来るだけ前向きなメロディを生み出す。
それを後から聞き直して、また捨てた。
『ラティ』じゃなかった。
不安や怯え、苦しみや切なさ、思考回路を離れない黒いもやもやした塊が、作業の邪魔をする。
どうしたって上手くいかなかった。抜け出せないスランプに陥っていた。

目を覚ますと、頭が痛かった。
一緒はベッドから抜け出て自室を出ようとするが、身体がだるくて仕方ない。
最近、あまり寝付きがよくないせいだろうか。
「……」
欠伸で頭痛を誤魔化し、自室を出る。

「この曲、タイトルはないの？」
それは、いつかひろ美が一緒を思って書き上げた曲だった。
「ああ、特につけてないな」
と、キオへ返すひろ美。するとキオは、普段と変わらない口調で一同へ言う。
「遠くの君、って感じかな。これ、ラストに入れようよ」
戸惑うひろ美だったが、マナトとゆーいちはすんなりと賛成する。
「うん、僕もそう思ってた」
「歌入れたら、もっと良い感じになるんちゃう？」
三人がひろ美を見つめる。数合わせのためだけに持ってきた曲が、

まさか日の目を見ることになるとは思わなかった。
「……そうだな」
合わせて書いた詩は一緒のことを歌っているのだが、誰も気づきそうになかった。しかしそれなら、それも良い。
あれから『ラティ』の中心はキオになっていた。マナトはまだ何か言い足りない様子だし、ゆーいちは普段通りを装っているがぎこちなく、ひろ美は苛立ちを抑えきれない。
キオがいなければ、解散していてもおかしくない空気が流れていた。

アルバイトをするほどの気力も沸かず、一緒はずっと家にいた。
小さなライブハウスを経営する両親に誘われ、だるい身体を引きずって店に行った。
幼い頃より見慣れてきた光景を目の当たりにしつつ、両親を手伝う。
もう若くないおじさんたちがステージで歌っていた。
「先に帰っても良いのよ？」
と、後ろから母に肩を叩かれる。
「え？　ああ……でも、まだやることあるし」
母を振り返った後、また元の方向へ視線を向ける。
「一人いなくたって変わらないわよ」
と、母は呆れた風に言ったが、一緒は何も言葉を返さなかった。
ライブというのはほとんど力仕事でもあるので、若い人がいるに越したことはない。
「あんまり無理しちゃ、ダメだからね。あの人も心配するわ」
「……うん」
スポットライトの光が眩しくて、軽い眩暈を覚えた。

アルバムに収録する曲が決まり、スタジオで何度か合わせた後にレコーディングする予定になる。

その間に一度だけライブへの出演が決まっており、同時進行で仕事を行っていくしかない。
「宣伝もかねて、新曲歌わなきゃだよね」
と、キオは言う。
「どれにする？」
「やっぱり、盛り上がる曲の方が良いんじゃないかな」
と、マナト。
「じゃあ、俺のいくか？　でもライブでやるのもなぁ」
と、ゆーいち。
「やっぱり、ラストの曲が良いなぁ。ひろ美の」
キオがふいに言って、ひろ美を見た。
「どうしてだ？」
と、つい冷たい口調で返してしまう。それでもキオは動じなかった。
「だって良い曲じゃん。ボク、ライブで歌ってみたい」
キオはいまや、リーダーともいうべき存在になっていた。
マナトとゆーいちが曖昧な態度で賛成し、ひろ美は仕方なく賛同する。――何をするにも、溜め息がついて回った。

Scene12.

アルバムに収録するのはひろ美作曲の歌が五曲、うち二曲で作詞もしている。残りの七曲を他の三人が作っていた。
『ラティ』の在り方が変わってきたのは確かだ。ひろ美の力が弱くなっていることもまた、事実だ。
久しぶりに顔を合わせても、一緒はひろ美を避けていた。
「今日はいつにもましてぴりぴりしてるな」
楽屋へ入っていった四人を見送って、小野が呟く。
「どうしたんですか？」
一緒が尋ね、小野は出来るだけ小さな声で答える。
「見てて気づかなかった？　あの四人、今、ケンカ中なんだよ」
「ケンカ……？」
と、目を丸くする一緒。小野は苦笑まじりに呟く。
「せっかく良いところまで来たのになぁ」
遠回しに解散の危機を知らせていた。一緒は自分が無関係だと思えず、悶々としてしまう。

楽屋で、ゆーいちが珍しく溜め息をついた。
携帯電話からブログを見ていたのだが、解散を怪しむメッセージが大量に書き込まれている。そんなことはない、とはっきり断言したかったが、ゆーいちにはその勇気が出ない。
「溜め息つくと、幸せが逃げちゃうよ」
と、キオが横からのぞき込んでくる。
「あ、ああ、そうやな」
ゆーいちは普段の自分を思い出して、携帯電話を閉じた。
衣装に着替え終えたひろ美は煙草を吸おうとして箱が空になったのに気づく。今吸おうとしているものが最後だ。
あいにくと予備は持っておらず、出番まで時間は十分にある。

マナトのヘアメイクが終わったら次は自分の番だし……と、考えて、ひろ美は手の空いているスタッフを探す。
楽屋の外は本番前の緊張感で慌ただしく、小野マネージャーの姿も見えない。
廊下を歩き出そうとした時、ひろ美は一緒が向かってくるのに気がついた。
お互いにドキッとして、微妙な距離を保ったまま一緒が問う。
「どうしたんですか？」
ひろ美は彼の目を直視しないようにして、千円札を差し出した。
「煙草、買ってきてくれるか」
受け取った一緒が、無理に笑顔を作って返事する。
「はいっ」
そしてすれ違っていく一緒を振り返らずに、ひろ美は楽屋へ戻った。
先ほどまでとは別の苛立ちが胸にひしめきだす。一緒はひろ美を見たが、明らかに壁を作っていた。ひろ美はそれに耐えきれなかった。
演奏で紛らわせられるほど、ひろ美は器用な人間でもない。

煙草を買いに行かされるのは三度目だった。
疲れていたり、何か別のことで頭がいっぱいになると、ひろ美は煙草を吸う回数が増える。
これまでの付き合いからそんなことまで知った一緒だが、それは飽くまでも尊敬する先輩として、後輩としての常識で。
――解散、してしまうのだろうか。
ライブハウスのそばにあるコンビニに目的の煙草がないことは分かっていた。少し歩くが、大通りに面した店でなければ買えないのだ。
一緒は少し早足で歩いた。こんな時だから、ひろ美も煙草がないと安心して演奏は出来ないだろう。

リハーサルで聞きそびれた新曲をきちんと聞くためにも、早めの行動が良い。
裏口から外に出ると、ファンの子たちが開場を待ちわびていた。
一緒は頭の隅でそれを羨ましく思いながら、裏の道を通って大通りを目指す。
――解散したら、マナトさんはおれと一緒にセッションでもしてくれないかな。
不謹慎なことを考えた一緒は、とっさに首を振ってその考えを振り払う。『ラティ』の解散を悲しいと思う反面、マナトに対する憧れを実現させるチャンスだと思っていた。
キオやゆーいち、ひろ美たちと別れるのは辛い。仲間として付き添ってきたから、出来ればずっと仲間でいさせて欲しい。
だけど、マナトのドラムでギターを奏でられるなら、解散してくれたって構わない。
「……違う」
『ラティ』がなくなってしまったら、あの人は悲しむ。みんな悲しむ。ファンの子たちも、みんなが嫌な思いをするだけだ。
一緒は頭が痛くなった。考えがあまりにも矛盾しすぎて、どうしたら良いか分からない。
大通りへ出ると同時に人が増え、一緒は軽い眩暈を覚えた。
立ち止まりそうになる足を無理矢理に動かして、横断歩道へ向かう――。

Scene13.

開場までまだ時間はあった。どうせ整理番号順に入るのだから、急ぐ必要はない。

エナは一人きりでのんびりとライブハウスを目指していた。

ふと前方の横断歩道に目をやり、エナははっとする。

おぼつかない足取りの少年めがけて走ってくる、一台のトラックに。

――まるで、映画を観ているようだった。少年が気づいた時には遅く、トラックがその華奢な身体を何事もなかったように轢く。

「……う、そ」

これから大事な、楽しみなライブだというのに、見てしまった。

少年はエナからわずか数メートル先に倒れて、動かない。

人々がざわついて、トラックは何事もなかったかのように遠ざかり、誰かが警察を呼ぶ。

気分が悪かった。今日もいつものように仲間たちと前列を陣取って暴れるつもりでいたのに。ひろ美を間近に見て、きゃあきゃあ騒ぐはずだったのに。

夢だと思いたかった。両足は歩くことをとっくにやめて、目の前の恐怖に怯えている。

――見てしまった。後悔しても、もう遅い。

それなら、あたしに出来ることはひとつだけ。……そうだよね、ひろ美さん？

一緒は戻ってこなかった。

仕方なくステージへ上がるひろ美だが、煙草がないと安心感もない。

そんなことも知らずにオーディエンスは普段と変わらぬ盛り上が

りを見せ、キオが歌い始めるとさらに沸いた。
一曲目は『ラティ』を代表する曲だった。知らない人でも十分に楽しめるロックだ。
ひろ美の気分とは裏腹に、ベースの調子はすこぶる良い。
今までで最高なんじゃないかというくらい、いい音だった。
曲が終わり、キオのＭＣに入る。打ち合わせ通りの言葉を並べていくキオ。
ひろ美がふと舞台袖に目を向けると、緊迫した様子で小野が他のスタッフと何か話をしているのが見えた。
「というわけで、次は二曲続けていきまーす！　みんな、付いてきてね！」
キオの言葉にはっとし、ドラムの音に耳を澄ませる。
ゆーいちのギターと同時に、ひろ美は演奏に入った。
――胸がざわついていた。煙草の安心感もそうだが、感覚的な何かが嫌な予感を訴えている。
眩しいライブはあっという間に終わりへ近づき、キオが言う。
「次に歌うのは、来月のアルバムに収録する新曲です」
ファンの間から拍手が聞こえてきた。
「遠くの君、っていうタイトル。ボクらにしてはちょっと珍しいタイプのバラードかな」
と、照れたように笑う。
「じゃあ、聞いて下さい」
アコースティックギターを構えたゆーいちに光が当たる。
ぽろぽろと紡ぎ出された音に、キオが静かな声で歌を乗せていく。
「初めからやりなおせるなら、君に素直な気持ちを伝えたい。遠すぎると知りながら、犯した過ちは消えてくれなくて」
会場の空気がしんみりする。
「次はただ、君の幸せを願う」
滑り込むように曲を形作るリズム、ひろ美の低音（ベース）。
不安な思いを想いに変えて、いつかどこかで聞いていてくれれば

いいと願う。
　ステージから戻った時に、いつものように「お疲れ様でした！かっこよかったです！」と、素人じみた台詞を平気で投げかけてくれるのだと、信じて。

「一緒くんが事故にあった」
「え？」
「嘘」
「な、何で？」
「どういうこと？」
　目を丸くする四人へ、小野は言う。
「すぐに病院に搬送されたんだけど、まだ意識は戻ってないようなんだ」
　信じられなかった。
　自分が煙草を買いに行かせたから――？　ひろ美は無意識に自分を責め、いつもの冷静な思考を手放してしまう。
「お、俺が、俺が……――」
　その場にくずおれそうになるひろ美を、マナトが支える。
「落ち着いて、ひろ美」
「俺のせいだ。だって、俺があいつに、煙草……なんて――」
　頭がぐしゃぐしゃで訳が分からない。愛しいはずの彼を、自分のせいで傷つけてしまった？
　嘘だ。信じられない、信じたくない。悲しくて、怖くて、苦しくて……気分が悪かった。

Scene14.

一緒のそばに付き添っていたエナは、看護婦らから帰りなさいと言われて帰路についた。自分はあの少年と何の関係もない、赤の他人だから。

一緒は運が良かった。翌日の夕方には目を覚まし、意識もはっきりしていた。

身体の方は右腕を骨折していたが、それだけで済む怪我ではなかった。脊髄を損傷し、自力での歩行が叶わなくなっていたのだ。

『ラティ』は今後の活動を休止した。無期限の活動休止である。

公式サイトでの発表にファンは騒然とした。事故にあったのはスタッフであり、死んだわけでもないのにどうして、と。

問題はひろ美にあった。

「会いたくない」

病院へ向かう車内で、ひろ美が言う。

「どんな顔をして会ったらいいのか、分からない」

「でも、イチオはひろ美のせいだとは思ってないんでしょ？」

「彼の母親からは確かにそう聞いたよ」

キオの問いに小野が答えるが、ひろ美の心が落ち着くことはなかった。

「大丈夫だよ、ひろ美。イチオは誰も責めたりしない」

マナトが言いながらひろ美の肩を抱きしめる。

「っ、でも……」

情けなく涙しそうになるひろ美を見て、ゆーいちは呆れた風に言った。

「会いたくないなら会わなきゃええ。俺らだけで見舞うわ」

冷たかった。ひろ美がはっとして、口を閉じる。

「でもあの歌を届けるのは、お前の仕事や」

みんなは分かっていたのだろうか、一様に口を閉ざして何も言わなかった。

病室の天井は真っ白で、気を抜くと夢の中にいるような錯覚を覚える。

医師からは奇跡的だと言われたが、実感するのに時間がかかった。起き上がろうとしても、下半身が動いてくれないのだ。そう知った時、一緒は絶望した。

もう二度と歩くことが出来ず、舞台に立つことすらも出来ないのか？　考えれば考えるだけ涙があふれ出て、苦しかった。

その一方で、一緒は妙に冷静な自分がいることも分かっていた。手はまだ動かせるのだから、楽器の演奏くらいは出来るはずだ。出来なかったら、その時に考えよう。

扉の開く音がしてそちらに顔を向けると、一緒は驚いた。

「あ……」

『ラティ』の四人と小野マネージャーだった。

「具合はどう？」

と、キオが相変わらずの人懐こい笑みで近寄ってくる。

「だいぶ良くなりました。腕は一ヶ月もあれば治るって」

と、一緒も笑みを返す。

「そうか。元気そうで安心したわ」

ベッド脇の椅子に座ったキオの隣へ来ながら、ゆーいちも笑う。

「はい。わざわざありがとうございます」

「本当に、イチオが生きててくれて良かった」

キオとは反対の側へ回り、マナトが優しく微笑む。

「……はい」

ひき逃げされて助かったのだから、一緒は本当に運が良い。

扉の前で立ちすくむひろ美を、小野が見守っていた。

一緒はそれを空気で感じ取り、言う。

「『ラティ』、活動休止しちゃったんですね。母から聞きました」

三人がそれぞれにひろ美へ意識を向ける。
「このまま解散なんて、おれは嫌です」
ひろ美はただ拳を握りしめていた。
これからのことを考えたときに、一緒は自分の思ったことを素直に伝えようと決めていた。
「おれはもう、二度と『ラティ』に関われないし、ステージにすら立てないかもしれない。だけど、みなさんにはずっと『ラティ』でいて欲しいんです」
一緒は純粋に彼らを応援していた。ひろ美が勇気を出して踏み出し、ゆーいちがキオの隣を譲る。
「だけど、俺は――」
寂しげな目をするひろ美に一緒は笑う。
「また、ステージで演奏して下さいよ。おれ、いつか見に行きます。『ラティ』らしいポジティヴな曲を、聞かせて下さい」
ひろ美は腰をかがめると、そっと一緒の頬を撫でた。一緒の前向きな発言で、もやもやしていた心が晴れていく。
「……そうだな、イチオ」
自分たちがやりたいのは軽快なリズムのパンクロック。明るくて前向きで、馬鹿みたいにすっきりした曲こそが『ラティ』。
「ひろ美さん、あの時はごめんなさい」
「いや、謝るのは俺の方だ。本当にごめんな。俺、ずっと苛々してて」
「知ってます」
一緒が笑う。ひろ美は溢れそうになる涙をこらえて、久しぶりに心から微笑んだ。
「……ああ」

Scene15.

「そんな気がしてたのよねぇ。あの翌日に『ラティ』が活動休止だもの」
「ああ、やっぱりか」
五人とすれ違いにやって来たエナは、一緒へまずそれを問うたのだった。
「でもひろ美さん、笑ってた。あんな顔、久しぶりだわ」
と、エナは夢見心地になる。
一緒はそんな彼女に呆れながら、言った。
「っていうか君は何？　ひろ美さんのファンなの？」
「もちろんよ。それも聞いて驚きなさい、あたしがファン第一号よ」
と、自慢げに言う。一緒は愉快そうに笑い、それから彼女へ言った。
「ありがとな。あの時、君がそばにいてくれたって聞いて、嬉しかったよ」
エナはドキッとしながら、言い返す。
「だって、あたしのすぐ近くに倒れてたんだもの。他に付き添ってくれそうな人もいなかったし」
「うん。だけどさ、それからも君はこうして、おれの見舞いに来てくれるだろ？」
「それが何？」
首を傾げるエナに、一緒は何か言おうとして、やめた。
「いや、やっぱり何でもない」
「ちょっと、気になるじゃない。言いなさいよー」
エナはそう言って一緒を睨んだが、すぐに笑顔を浮かべた。
『ラティ』が活動を再開したのはアルバムの発売から半年後のことだった。

活動休止を良い機会として、それぞれが今後の活動に向けて力を蓄えたのだ。
ファンのためではなく、自分たちのために。
キオはヴォイストレーニングを重ねて歌唱力を向上させた。大人びた歌も似合うようになった。
ゆーいちは一人で旅に出ては、旅先でギターを弾いた。それまで知らなかったことをたくさん知った。
マナトは様々なミュージシャンとセッションし、一方で自分のドラムセットを購入した。少しだけ借金が出来た。
ひろ美はベースを基礎から学び直し、そして初心を思い出しながら昔のように作曲を純粋に楽しんだ。
一緒の言う『ラティ』を今度こそ実現させるために、納得がいくまで曲を作った。

活動を再開する頃には、すっかり人気も落ちていた。当たり前だ。
「あ、久しぶりー！」
「おう、久しぶりやな」
「久しぶりだね、ひろ美」
以前までの苛立ちは陰もなく消え、ひろ美は意識せずとも笑えるようになっていた。
「ああ、久しぶり」
それぞれに成長を遂げた四人は、口にせずとも同じ方向を目指していた。それぞれが目を合わせて、頷く。
「じゃあ、心機一転頑張りますか！」
と、キオが右手を差し出した。
「おう、今度こそやってみせたるで」
と、ゆーいちがその手に手を重ねる。
「誰でもない僕たちの音楽で」
決心を感じさせる声でマナトが手を重ね、ひろ美はその上に手を置いた。

「目指すはメジャーデビューだ」
おー！　と、かけ声をして手を離す。四人全員がやる気に満ちた顔をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8844n/

使いっ走りとベーシスト

2010年10月11日18時11分発行